

# 日本近傍において将来起こりうる 航空路火山灰の分布並びにそのモニタリング

安田 成夫<sup>1</sup>・梶谷 義雄<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 京都大学防災研究所

E-mail: yasuda@imdr.dpri.kyoto-u.ac.jp

<sup>2</sup> 京都大学防災研究所

E-mail: kajitani@imdr.dpri.kyoto-u.ac.jp

2010年4月14日、イスランド共和国のエイヤフィヤットラヨークトル (Eyjafjallajökull) 火山が噴火した。火山は首都レイキャビクの東方向 125 km に位置する。噴煙は上空 10,000m以上の成層圏に達し、火山灰は上空の気流に乗り西ヨーロッパ全土に拡散したために、ヨーロッパの空港を中心に航空路の混乱が生じた。短期間ではあったが、欧州約 30 カ国の空港が一時閉鎖し、1 週間に航空機 10 万便が運休した。結果的に航空路の混乱はヨーロッパを中心に経済活動に多大な影響を及ぼした。日本は、世界有数の火山国の一つであるばかりでなく、東アジア圏に限ってみても、やはり過去に大規模噴火を記録している。昨今、東アジア圏における経済的発展は眼を見張るものがあるとともに、近隣諸国がサプライチェーンで結ばれるにつれて、航空機による人的移動も活発化している。このような状況にあって、大規模火山噴火が航空機に及ぼす影響を見過すことはできない。本報告では、日本近傍において将来想定される大規模噴火について、シナリオを示すとともに、航空路火山灰のモニタリングについて示す。

キーワード：航空路火山灰，民間航空，経済損失

